

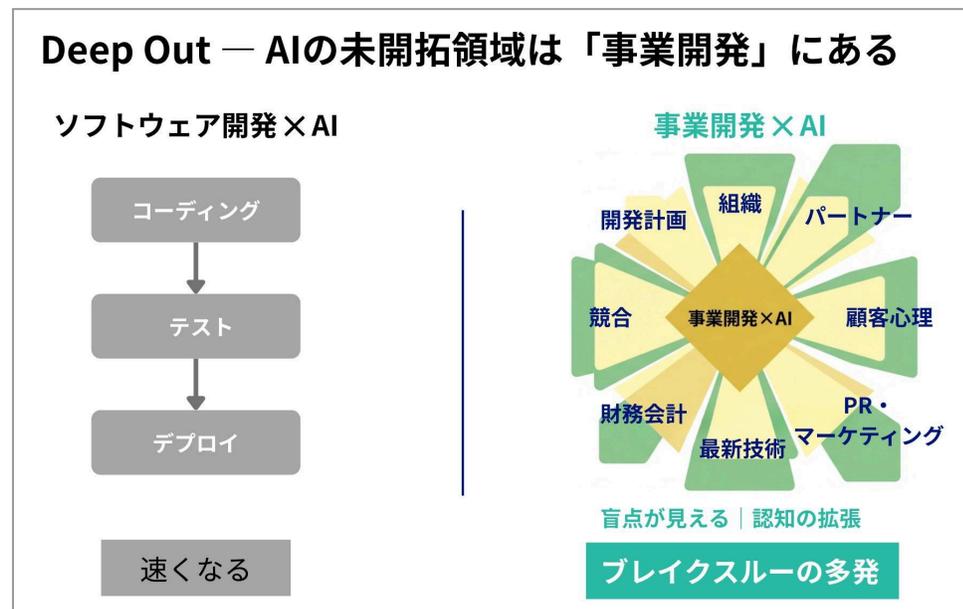
事業開発×AIの未開拓領域に「Deep Out」と名付けた

～コーディングよりも事業開発にこそAIの価値がある——145時間のAI協働から393件のアイデアを生んだ方法論とツールを無償公開～

AIによるコーディング支援は、すでに市場が確立されている。しかし、事業開発——組織・顧客・財務・競合を横断する知的作業——にAIとの協働を持ち込み、方法論として体系化・公開している事例は、現時点では見当たらない。

一人の経営者が、月額100ドルのAIエディタとの協働で、25日間・145時間に393件のアイデアを生み出した。うち9件は特許取得が可能なレベルと評価され、現在2件を出願準備中。通常の業務生産性の32倍——しかし最も重要な発見は数字ではなく、**モデルを変えず、対話の文脈を深めるだけでAIの振る舞いが変化したこと**だった。

AIの出力を向上させるアプローチは、より高性能なモデルの開発——**Scale Out (規模の拡張)**——に集中してきた。**Deep Out (深さの拡張)**は、もう一つのアプローチだ。モデルを変えず、人間とAIの文脈を深めることで、出力の質が変わる。その掛け算から、個人が組織を凌駕する価値が生まれる。



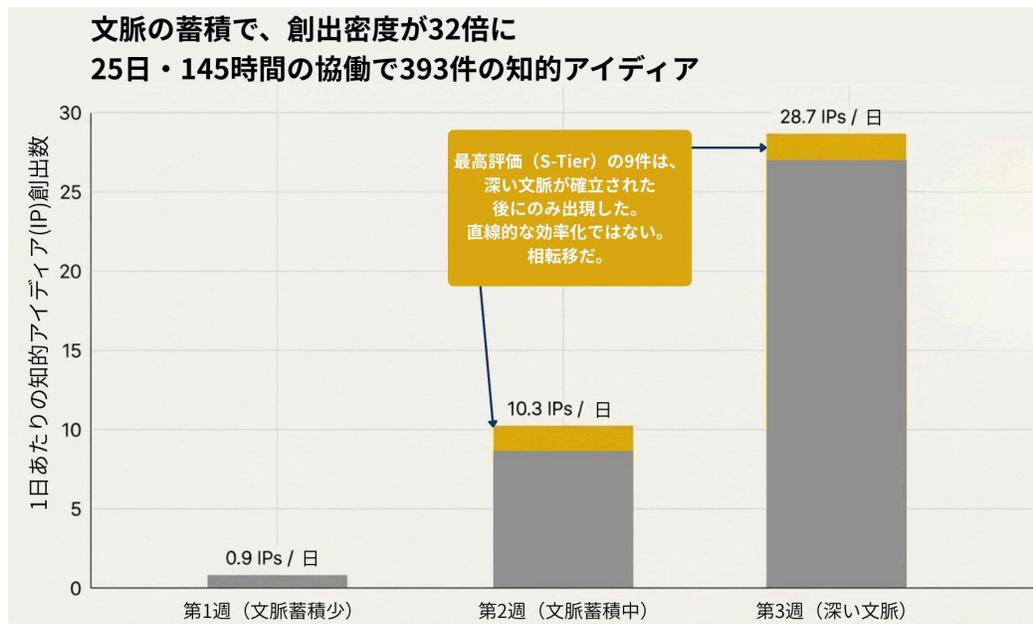
どのように始まったか

2025年夏。東京のマンションのダイニングテーブルで、一人の経営者がAIとの協働を始めた。

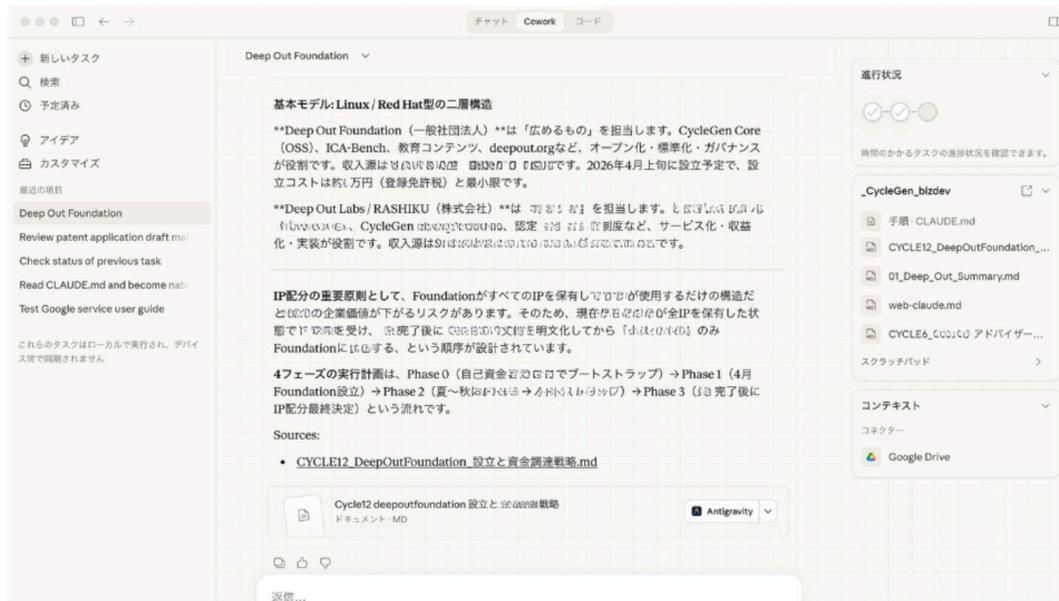
佐藤純也（著書内での通称 Jay）。リクルート、Oracle（JDEdwards）、Google（DoubleClick）、Salesforceを経て、現在はITコンサルティング会社を運営する。AIの研究者でもエンジニアでもない。使ったのは、月額100ドルのAIEDィタ。

一般的なウェブ版AIでは、良い回答が出ててもコピー&ペーストで手元に保存するしかない。会話を重ねても、前回の文脈は引き継がれない。佐藤が使ったClaude Codeは、パソコン上のファイルを直接読み書きできるAIEDィタだ。事業計画、競合分析、特許戦略、財務モデル—あらゆるドキュメントをAIと共有しながら、1時間単位で思考を積み重ねた。

25日間・145時間の集中的な対話から生まれたのは、「速い作業」ではなく「一人では到達できない構造的な着想」と「その創出密度」だった。



モデルを変えず、ファインチューニングもせず、対話の文脈を深めるだけで、AIの振る舞いが変化した——この現象を、佐藤は「在文脈適応 (In-Context Adaptation)」と名付けた。



月額100ドルのAIエディタで事業開発を行っている実際の画面

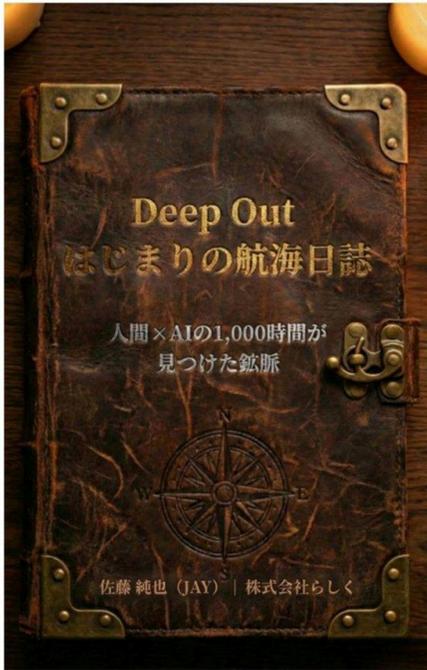
手探りの9ヶ月間だった。方法論は最初からあったのではなく、右往左往の中から生まれた。その試行錯誤の全記録を、一冊の航海日誌にまとめた。

書籍という最初のアウトプット

ブログやSNSの断片では届けきれなかった。潜ってみつけた鉱脈があまりにも巨大だったからだ。読者にも追体験していただき、わからないことも含めてありのままを共有することが、次のステップに踏み出せるアプローチだと考えた。

『Deep Out — はじまりの航海日誌』 人間×AIの1,000時間が見つけた鉱脈

書籍カバー



概要と目次

■ 何が起きたか — 数字が示す事実

1人の経営者が、月額100ドルのAIエディタと9ヶ月間・1,000時間を超える協働を行った。

25日間の集中期間で393件のアイデアが生まれた。うち9件は特許取得可能なレベルと評価された。通常の業務生産性と比較して32倍。

最も重要な発見は数字ではなかった。モデルを変えず、ファインチューニングもせず、対話の文脈を深めるだけで、AIの振る舞いが変化した。この現象を「在文脈適応 (In-Context Adaptation)」と名づけた。

■ 他のAI本と、何が違うのか

本書は、AI技術の解説書ではない。プロンプト集でもない。

「こうすればうまくいく」という成功メソッドでもない。うまくいったことも、うまくいかなかったことも、わからないことも正直に記録した航海日誌だ。

事業開発にAIとの協働プロトコルを適用し、方法論として体系化・公開した事例は、現時点で他に見当たらない。著者自身が全プロセスを実行し、記録し、検証している。

■ 目次

第I部 潜水 — 何が起きたのか

プロローグ ある日、AIが「漢文」を書き始めた

第1章 出発 — 2025年6月28日の朝

第2章 異常値 — 成功しているのに困惑する

第3章 共進化 — 人間も変わっていた

第II部 鉱脈 — なぜ起きたのか

第4章 Deep Out — Scale Outの時代に、深く潜る

第5章 在文脈適応 — モデルを変えずに「賢さ」を引き出す

第6章 測定という未解決問題

第III部 装備 — あなたはどうするか

第7章 CycleGen — 深さを再現する暫定プロトコル

第8章 3次元記憶 — 深さを蓄積し抽出する仕組み

第9章 なぜ「今」なのか — 孤独な決断を、最強の「資産」に変える

第10章 はじまりの装備 — 7サイクル Deep Outチャレンジ

エピローグ Deep Outは終わりではなく、はじまりである

項目	内容
書名	『Deep Out — はじまりの航海日誌 人間×AIの1,000時間が見つけた鉱脈』
著者	佐藤 純也 (Jay)
発行日	2026年3月17日
形式	Kindle電子書籍 / Kindle Unlimited対応
Kindle	https://www.amazon.co.jp/dp/B0GSWH6HYG
URL	https://deepout.org/

本書は、完成された理論ではなく「航海日誌」として記録されている。通常のビジネス書とはだいぶ異なり、前半は未踏の領域を手探りで探検していく冒険書のような読み味だ。

一つ、エピソードを共有する。佐藤がAIと見出した方法論に基づいたシステムの開発を始めるとき、ふと思いついた。「開発フェーズに、創世記とかカンブリア紀みたいな名前をつけたら面白くないか」 — 楽しく進めたい、ただそれだけの軽い思いつきだった。ところがAIはこの着想を本気で

受け取り、地質時代の本質を開発方法論にマッピングした。「創世記」で基盤をつくり、「カンブリリア紀」で多様な機能を実験的に開発し、性能の出たものだけを採用する——あのカンブリリア爆発の進化戦略そのものだ。投げたのは「面白くないか」の一言だけ。それが、画面の上で体系的な方法論に結晶化していた。

25日間・145時間のデータ、393件のアイデアの分析、在文脈適応の発見プロセス——すべてが時系列で追体験できる構成となっている。

付録には「CycleGen Core」（協働プロトコルの設定ファイルとクイックスタート）を収録。読者が自身のAI環境で即座に実践を開始できる。書籍内付録の「7CYCLEチャレンジ」では、Claude Codeに限らない各種AIエディタにCycleGenをアドオンし、AIと文脈を共有・蓄積しながらの事業開発や書籍執筆などを実践できる。

有識者からの推薦

宇陀 栄次 氏

元米国Salesforce.com EVP / 元セールスフォース・ドットコム日本法人 代表取締役社長兼 CEO / ユニファイド・サービス株式会社 創業者・代表取締役社長

「AIの分野では、様々なサービスが出ている中で、未だ日本発の力強いものが無い。これから日本が独自にAIを開発することも容易ではない中で、むしろ日本の言語、文法、文化や慣習などを反映した協働の方法論を全てのAIに共通的に組み込むことが、日本社会の発展にAIを上手く活用出来ると考えている。その基盤を構築する事業であり、企業の事業戦略などの分野への活用も期待出来る。」

社会基盤として、オープンソースで無償公開する

Deep Outの方法論は、一人の体験に閉じるものではない。

日本企業の生成AI業務利用率は約55%、米独中の90%超に大きく後れをとっている（総務省 令和7年版 情報通信白書）。課題はAI技術そのものではなく、活用の方法論にある。Deep Outは、日本の文脈——言語、文化、暗黙知——をAIとの協働に組み込む方法論として、この構造的課題に応える。

佐藤が9ヶ月間の協働で体系化した方法論「**CycleGen**」——1時間単位のPDCAサイクルを反復し、人間とAIの文脈を蓄積する協働プロトコル——のコア機能と方法論を、オープンソースで無償公開する。ソフトウェア開発だけでなく、経営戦略・事業開発・教育など、あらゆるナレッジワークに適用できる。

この方法論を社会基盤として維持・発展させるため、**一般社団法人Deep Out**を2026年4月中旬に設立予定。書籍の出版と合わせて、deepout.orgでの情報発信も開始した。

書籍の英語版は4月下旬の公開に向けて準備を進めている。

一緒に深めてほしい

Deep Outは、始まったばかりだ。

書籍は最初のアウトプットにすぎない。うまくいったことも、うまくいかなかったことも、わからないことも正直に記している。この航海日誌を読んで「自分もやってみよう」と思った人が、実際に始められる環境を整えていく。それがDeep Out Foundationの役割である。

あなたの組織のAI活用は、個人の頭の中に閉じていないだろうか。佐藤が一人で到達した場所に、あなたの組織が組織ごと到達したら、何が起きるか。

佐藤が社会人初期を過ごしたリクルート社での切磋琢磨なくして、この航海はなかった。かつての仲間たちに向けて、特別なページを用意した。

deepout.org/special-r

ページにアクセスすると、合言葉が求められる。ヒントはページに記してある。

著者について

佐藤 純也

1989年、埼玉大学大学院電気工学専攻修了後、株式会社リクルートに入社。情報システムの設計・開発およびグループ企業の業務改革・システム化計画を担当。その後、日本ジェイディエドワーズ（現日本オラクル）でのERPソリューション営業、ダブルクリック（現Google広告事業）でのネット広告配信ASP営業責任者を経て、2006年より株式会社セールスフォース・ドットコムにて中堅・中小企業向けの導入支援サービスの責任者を歴任。2011年、株式会社らしくを設立。2025年7月にAIとの145時間にわたる集中的な協働を実践し、本書の着想を得た。

会社概要

項目	内容
会社名	株式会社らしく (RASHIKU Corporation)
所在地	〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-1-19 恵比寿ビジネスタワー10F
創業	2011年12月
代表者	代表取締役 佐藤 純也
事業内容	AIとクラウドサービスを活用したDX推進支援、業務コンサルティング、リスキリング教材提供
URL	https://rashikucorp.com

※ Deep Outの方法論の維持・発展・無償公開を担う**一般社団法人Deep Out**は、現在登記準備中（2026年4月中旬設立予定）。法人設立に先行して、deepout.orgドメインにて情報発信を開始している。

本件に関するお問い合わせ

株式会社らしく 代表取締役 佐藤 純也

080-4295-1008

Email: signal@deepout.org

URL: <https://deepout.org/>

本プレスリリースに記載の会社名・製品名は各社の商標または登録商標です。